

Title	山形市方言のモダリティ形式「ッダ」
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 7 P.51-P.61
Issue Date	2005-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/23229
DOI	10.18910/23229
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

山形市方言のモダリティ形式「ッダ」

渋谷 勝己

【キーワード】 ッダ、モダリティ、自明性、聞き手目当て

【要旨】

本稿では、山形市方言のッダを取り上げて、その形式・意味・機能的な特徴を以下のように特徴づける。

(a) 形式的特徴と分布

(a-1) ッダは不変化詞であり、つねに促音を伴う(2.1)。

(a-2) ッダは平叙文にのみ後接し、平叙文であれば述語の種類(動詞述語・形容詞述語等)は問わない(2.2.1)。

(a-3) 前接形式には、蓋然性を表すモダリティ形式(ガモスンネ)や過去のケなどがある。後接形式としてはナとズがあり、主文末ではこの2形式のいずれかと必ず共起して用いられる。ッダが単独で用いられることはない(2.2.2)。

(a-4) ッダは、主文末のほか、従属節のうちス節のなかで用いられる(2.2.3)。

(b) 用法

(b-1) ッダは、「話し手は、ある根拠や確信・信念に基づいて、ある行動や状態が生起する/したのは自明のこと、当然のことであると考えている」といったことを表す(3.1)。

(b-2) 「自明性」といった意味と連動して、ッダは、当為表現や理由節を伴うことが多い(3.2)。

(b-3) またッダは、一定の条件のもとで、語用論的に、自身の行動の正当性の主張、聞き手にたいする非難や説得などを表すことがある(3.3)。

(b-4) ッダには聞き手目当て性がある(3.4)。

(b-5) ッダは、論理的推論が行われないという点で、ハズダと用法を異にする(3.5)。

1. はじめに

1.1. 目的

山形市方言には、主文の述語用言の後ろ、一群の文末詞の前に位置して用いられる「ッダ」といったモダリティ形式がある*。

(1) 誰も行かないから、俺が行ったッダナー(ナは聞き手目当ての文末詞。その用法は未分析)

(2) おまえがやらないから、俺がやるのッダズー(ズは文末詞。渋谷 2000 参照)。

本稿では、このッダを取り上げて、その文法的な特徴を記述することを試みる。

1.2. データ

分析のデータは、(a) 筆者（18歳まで山形市に在住、以後24歳まで東京、その後45歳の現在まで大阪）の内省を中心とし、適宜、(b) その他の山形市方言の録音資料（筆者収録）および(c) 国立国語研究所（1978）の談話データ（山形市の北方約20kmの河北町谷地で収録）を参照した。(b) はいずれも高年層および活躍層母語話者の会話データである。

(a) および(b)のデータについては、理解の便を考慮して、問題となる形式のみをカタカナで示す。(b)についてはさらに、使用された文脈がわかりやすいように、適宜加工して提示する。また(c)については、原典を尊重し、談話データおよびその共通語訳をそのまま引用する。

以下、ッダについて、ッダの形式的特徴と分布（2節）、ッダの用法（3節）の順に記述することにする。

2. ッダの形式的特徴と分布

本節ではまず、ッダの形式的特徴と文の内部における分布のありかたを整理する。

2.1. ッダの形式的特徴

ッダは、必ず促音の「ッ」を含む。島根方言など、他の方言の「行くだ」のように、促音がないかたちで用いられることはない（例文の「*」は、その文が不適格であることを示す。以下同様）。

(3) *誰も行かないから、俺が行ったダナー

ちなみに、山形市方言のッダが付加した文は、ノダ文ではない。次のように、ッダがノダに後接する場合もある。

(4) 誰も行かないから、俺が行くノッダナー

なお、当該方言には、形式的に類似するツタ（<「と言った」）という伝聞形式があるが、これとッダとは、意味・用法を全く異にする¹⁾。

(5) あそこの息子、大阪に行ったツタネー（行ったということだね）

2.2. ッダの分布

ここでは、ッダの生起する位置について、使用される文タイプ（2.2.1）、前接形式と後接形式（2.2.2）、文の内部での位置（2.2.3）の3点について確認する。

2.2.1. 使用される文タイプ

ッダは、すでにあげた例に見るように、平叙文とのみ共起する。命令文、疑問文などと

は共起しない。

- (6) *おまえが行けッダナー (命令文)
- (7) *おまえ、あした学校に行くッダガー? (yes-no 疑問文)
- (8) *誰が学校に行くッダー? (疑問詞疑問文)

平叙文であれば、動詞述語文、形容詞述語文、形容動詞述語文、名詞述語文いずれでもかまわない。

- (9) 全然動かないんだもの、太ルッダナー (動詞述語文)
 - (10) 昔は扇風機もなにもないんだから、夏は暑イッダナネー (形容詞述語文)
 - (11) なにを言ったって、むかしに比べれば楽ッダナー (形容動詞述語肯定文)
 - (12) 畑仕事一人でやっているんだから、楽デナイッダナー (形容動詞述語否定文)
- 名詞文や形容動詞文、ノダ文などダで終わる文の場合には、ダを落としてッダを後接する場合がある。ダを省略するのは、ノダの場合は義務的である。

- (13) まだ若いんだもの、元氣 {ダ/φ} ッダナー (形容動詞述語文)
- (14) A: 太郎さんはいつ退職したんだっけ?
B: なに言ってるの。まだ現役 {ダ/φ} ッダナー (名詞述語文)
- (15) 誰も行かないから、俺が行くの {*ダ/φ} ッダナー (ノダ文)

2.2.2. 前接形式と後接形式

次に、主文末で用いられたときにッダの前後に現れうる文法形式 (相互承接のありかた) を確認することによって、ッダの文法的な性格や位置づけを確認しておく。

(a) 前接形式

まず、ッダに先行する形式として、蓋然性を表す認識のモダリティ形式がある。

- (16) おまえが来てもいいと言ったんだから、太郎は来るつもりダッケガモスンネケッダナー (来るつもりだったかもしれなかったよ)

ただし、同じ認識のモダリティ形式でも、なんらかの証拠に基づいた判断を表すミデダ (みただ) には後接しない²⁾。

- (17) *太郎は来るミデダケッダナー (来るみただったよ)

これは、3 節に示すッダの意味 (事態の自明性) ということと、ミデダが表す話し手の観察に基づく判断といった内容が矛盾するからである。

また、ッダには、ケ (渋谷 1999a) が前接することがある。この場合のケは、過去や報告を表すものである (以下、国立国語研究所 1978 から引用した発話例の波線部は聴き取り困難な箇所。共通語訳のあとの数字は当該用例の記載ページ。以下同様)。

- (18) ンダ ヨスコ° ド サンナネケッダナエ。(そう 夜仕事 (を) しなければならなかったもんだよな。26 ペ)
- (19) ンダ ナンカ°エгент ジョーブンナワ ホレ ヤマンナノ ホー ジョーブンダ

テ ユーケッダナエ (そう 長いけれど 丈夫なのは ほら 山のものの 方(が)
丈夫だって 言うんだったよな。55ペ)

(20) スグロヨス タエヘンダケッダナナエ。(選り残り打ち(が) たいへんだったよな。
97ペ)

(b) 後接形式

一方、後続する要素との関係では、ッダは、単独で用いられることはなく、上の例文に見るように、必ず文末詞ナもしくはズ (いずれも、ッダのあとではナー・ズーと長呼されることが多い) のいずれかと共起して用いられるといった特徴がある。

(21) *誰も行かないから、俺が行ったッダ

(22) *おまえがやらないから、俺がやるのッダ

ナおよびズ以外の文末詞がッダの直後に後接することはない。命令文や疑問文などにも後接するなど汎用性の高いネ (渋谷 2003) やハ (渋谷 1999b) も、ッダに直接後接することはない。

(23) *誰も行かないから、俺が行ったッダネー

(24) *誰も行かないから、俺が行ったッダハー

これらの文末詞は、「ッダ+ナ/ズ」のかたちの後でのみ用いることができる。

(25) 誰も行かないから、俺が行ったッダ {ナ/ズ} {ネー/ハー}

(c) 国立国語研究所 (1978) における用例分布

(a) と (b) にまとめた前接形式および後接形式の、河北町談話資料 (国立国語研究所 1978) のなかでの用例分布 (全 19 例) は、以下のとおりであった: ョッダ+ナ 8 例 (これにさらに共通語の「ね」相当の河北町方言形式ナ、ナエが後接する場合あり。以下同様)、ケ+ッダ+ナ 9 例、ケ+ッダ+ナエ 1 例 (ッダにはネが直接後接することはないという上の記述と矛盾するが、当該箇所には「聞き取りにくい部分」との注記がある。山形市方言と異なる共起特徴があることも考えられるが、談話資料に誤りがあるものかもしれない)、ノ+ッダ+ナ 1 例。

2.2.3. 文の内部での位置

ッダは、主文末および並列のス (共通語の「し」) 節のみに現れて、ほかの従属節内部に現れることはない。

(26) きょうは郵便局に行かなければならないッダス、あしたは市役所に行かなければならないッダス、全然休む暇がない (「し」節)

(27) *太郎が行ったッダガラ、次郎も行った (「から」節)

(28) *太郎が来たッダ時、次郎は勉強していた (連体節)

3. ッダの用法

本節では、ッダの用法について、基本的な用法 (3.1) を確認したあと、ッダの意味をさらに明確にするために、ッダの構文的・談話的特徴 (3.2)、語用論的意味 (3.3)、聞き手目当て性 (3.4)、ハズダとの相違 (3.5) といった点から考察する。

3.1. 基本的用法

ッダは、次のような意味を表す、命題目当てのモダリティ形式である³⁾。

(29) 話し手は、ある根拠や確信・信念に基づいて、ある行動や状態 (ッダのスコープのなかにある命題) が生起する／したのは自明のこと、当然のことであると考えている。

たとえば、

(30) A: あいつ、怒っているのかなー?

B: ンダ ッダナー (そうだよ)、おまえがあんなことをしたんだから

の文では、「おまえがあいつを怒らせるようなあんなことをした」という既定の事態に基づいて、「あいつが怒っている」のは当然であるという話し手の考えを表明する文である。また、

(31) (誰かが出なければならぬ) 会議には誰も行かないから、俺が行くッダナーの例では、「俺が行く」ということは、「誰も行かない／行こうとしない」ということを根拠にして、話し手が好むと好まざるとにかかわらず、話し手には行くという選択肢しかない、話し手が行くしかないということは自明のことであるという話し手の考えを聞き手に伝える (訴える) 文である。

ここで重要なのは、

(32) (29) で「自明のこと、当然のこと」とする話し手の認識は、その場において何らかの根拠に基づいて計算が行われて導き出されるといったものではない。発話時点までにはその計算が完了し、話し手にとっては当該事態の生起等はすでに自明のこと、もう新たな判断の介入する余地のない確固とした事態として把握済みであるといった認識である

ということである。この点、3.5 で比較するハズダとの違いが見られるところである。

3.2. ッダの構文的・談話的特徴

ッダが用いられる文には、当該形式の表す「話し手は当該事態が生起するのは当然であると考えている」といった意味と連動して、以下のような構文的・談話的特徴が観察される。

(a) 当為を表すンナネ (しなければならぬ) に後接する場合が多い。

(33) ンダ ヨスコ⁴⁾ ド サンナネケッダナナエ。

- (そう 夜仕事(を) しなければならなかったもんだよな。26 ペ)
- (34) タギモノ ショエダラ エカ^ンナネケッダナ ナヅナエ ンダゲナエ。
(焚き物 背負いには 行かねばならなかったもんだな 夏(になると)ね。だからねえ。37 ペ)
- (35) A: 僕、歩くのいやだなあ
B: 車がないんだもの、歩かなければならないッダナー
- (36) ほかにまわりにだれもないんだから、俺一人でしなければならぬケッダナネー
- (37) (お父さんの発話) おまえがお年玉もらったのなら、おとうさんからもお礼を言わなければならぬケッダナー (お礼を言うのが当然だった)
- (b) 理由の接続詞や理由節など、そう考える根拠を述べる部分を伴うことが多い。
- (38) ンダハゲ カシエカ^ン ンナネケッダナナー。
(だから 稼がねばならなかったわけだよな。63 ペ)
- (39) ンダゲ オナコ^ンシューナ ラグデナエッダナナヤ。
(だから 女の人など(は) 楽でないんだよなあ。85 ペ)
- (40) 小さい頃は走り回っていたんだから、しょっちゅう怪我シタケッダナー
(怪我をしたよ)
- (c) 会話の連鎖のなかでは、会話の冒頭で使われることはなく、会話の相手の述べたことにたいする反応として、第二発話部で用いられることが多い。また、第二発話部に現れる場合には、第一発話部のあとにポーズを挟まずに発話されることが多い。
- (41) A: あいつ、怒っているのかなー?
B: ンダッダナー(そうだよ)、おまえがあんなことをしたんだから(=(30))
これは、話し手は当該事態が生起することは当然だと考えているために、会話のこの段階で新たに判断を加える必要がないからである。

3.3. 語用論的意味

ッダはまた、話し手が自明の事態であると考えていることを表すことから、次のような語用論的意味をもたらすことがある。網羅的なものではないが、ッダの意味をより明確にするために、特徴的なものをいくつかあげておく。

(a) 一人称主語で、自分の不備・失敗等を表す文に後接する場合には、失敗して当然の理由がある、必ずしも自分だけの責任ではないといったことを訴える文、自分の行動を正当化しようとする文になることがある。

- (42) 当時はまだこのサークルに入ったばかりだから、サークルのしきたりなんかわからないッダナネー
- (43) おまえ、あのとき食べなかったから、もういらないと思って、俺が食べたッダ

ナー

(44) A : それ、私がやろうと思っていたのに。どうして父さんがやるのよ

B : おまえがなかなかしようとしなから、シテケダノッダナー
(やってあげたんだよ)

(45) A : あんた、どうして花子を歩かせないのよ

B : 足が痛いっていうから、おんぶしてあげているのッダナー

(46) A : あしたの会議、なんでおまえが出るんだよ

B : 誰も出ないから、俺が出るのッダナー

(b) 一方、二人称、三人称主語文の場合には、次のような語用論的な意味をもつことがある。

(b-1) 聞き手や第三者が当然やるべきことを怠っているといた状況においては、非難を表す。

(47) あした遠足なら、ちゃんとそう言わなければならないケッダナー。そうすればちゃんと用意してあげたのに

(48) A : 今度から学校に遅れないように、早く起きることにするよ

B : あたりまえッダナー

次の例のように、聞き手がよいことをした場合について使用されることもないわけではない。

(49) A : お母さん、喜んでいるの？

B : ?ンダッダナー、おまえが大阪大学に合格したんだから

しかしこの場合にも、「ンダッダナー」に後続する「おまえが大阪大学に合格したんだから」は語用論的に「おまえが予想外に大阪大学なんか合格して、びっくりさせるから」といった悪い（期待に反した）行いとして解釈される傾向が強く、一瞬、先行する「お母さんが喜ぶ」という事態と矛盾した（あるいはシニカルな）解釈が得られる発話交換になる。

(b-2) 聞き手や第三者が当然やるべきことをやる意志がないといった状況においては、ッダは説得を表す。

(50) (友だちの家に行くとき約束しながら天気が悪いので躊躇している子どもに) 約束したんだから、ちゃんと行かなければならないッダナー

(51) (夜遊びをしている子どもに) まだ学生なんだから、早く家に帰って来なければならぬッダナー

ただし、(b-1) 非難や (b-2) 説得を表すッダは、いずれも聞き手のポジティブな（非難など）あるいはネガティブな（説得など）フェースをつぶすことになるので、目上から目下にたいして、あるいは親しい者同士でなければ使いにくい。

3.4. 聞き手目当て性

3.1 でまとめたように、ッダは、基本的に命題目当てのモダリティ形式であると思われるが、主文末においては、聞き手がいる場合にのみ用いられ、独り言のなかで用いられることはない。

- (52) * (独り言で) あれはこうやらなければならないところだったッダナー (ナは独り言のナ。聞き手目当てのナとは異なる)

ッダが付加する命題は話し手が自明の事態とみなしている内容を表すものであり、そのような命題を話し手自身に伝えてもリダングントな情報であって、ッダは、聞き手がいてはじめてその機能的な意義を発揮する形式だからである。ただし、ッダは少なくとも従属節のなかの「し」節には入るので、聞き手目当て性をもってはいても、従属節のなかでは用いられないほかの伝達のモダリティ形式(ズ・ヨ・ハ・ネなど)とは性格が異なる。

3.5. ハズダとの相違

最後に、ッダと同じ「当然」といった意味をもつ点で類似する、ハズダの意味・用法との違いを確認しておこう。

共通語の「はずだ」の意味については、「客観的な条件・状況からして、その事柄が当然あるべき状態であるという判断」(森田 1980: 950)、あるいは「論理的根拠(判断理由)による判断」(森山 1995)などと説明されることがあるが、山形市方言のハズダもその意味・用法は変わらない。森田(同 951)が指摘するように、「予想した解答に対する話し手の自信と、その解答がはたして正しいかどうか未確認・未証明であることと、二つの要素が含まれている」形式である。たとえば、

(53) 蔵王の上に入道雲が出ているから、今は晴れていても午後は雨が降るハズダにおいては、「蔵王に入道雲が出ている」という眼前の事態を根拠として、話し手は論理的に判断し、「午後は雨が降る」という帰結(森田のいう「予想した解答」)を導き出している。一方、

(54) 蔵王の上に入道雲が出ているから、午後は雨が降るッダナーのように、同じ文でッダを用いた場合には、「蔵王の入道雲は100%午後の雨をもたらす」という話し手のこれまでの例外のない経験などから、午後の雨は考えるまでもないという話し手にとっての自明の理を表現する文になる。この場合、話し手においては、論理的な判断は行われていない(3.1 (c) 参照)。「蔵王の上の入道雲は午後の雨をもたらす」ということは、話し手にとっては、「空は青い」「夜は暗い」といったことと同様に、自明のこととして確立している命題である。次の例を参照。

- (55) A: 空が青いね

B: なにいつてるの、空は当然青いッダナー

この、なんらかの根拠をふまえての論理的な判断か(ハズダ)、話し手にとって自明のこ

とか(ッダ)といった両者の違いは、次のような例でよりいっそう明確になる。

- (56) 朝の5時に東京を出たのだから、もうそろそろ着いてもいい{ハズダが/＊ッダナー}。渋滞にでも巻き込まれているのかな。

この例のように、一回的な出来事について、(所用時間について)論理的な計算を行うような場合には、また、さらに、その計算を修正しなければならない要因を指摘するような文言(「渋滞にでも巻き込まれているのかな」)がある場合には、ハズダは使えるが、ッダは使えない。次のような例も同様。

- (57) 佐藤はタバコは吸わないから、たぶん禁煙席にいる{はずだ/＊ッダナー}(日本語記述文法研究会編2003:162の例)

- (58) A: 三日前の朝、太郎ここに来なかった?

B: んー、たしか来た{ハズダナ/＊ッダナー}。ちょっと待って。聞いてみるから

これらの例では、「たぶん・たしか」といった判断過程の存在を表す副詞や、「ちょっと待って。聞いてみるから」といった、事態が話し手にとって自明でないことを示すことばが、ッダの使用をブロックしている。

以上のように、ハズダとッダは、「当然視する」といった類似した意味をもちつつも、異なった意味・用法をもつ形式である。ちなみに、ハズダとッダは同じ述語のなかで共起することはない。

- (59) *のこぎりはそのへんにあるハズッダナー

しかし、ノダとの位置関係については、ハズダの場合にはノダはハズダに後接するがッダには前接するといった違いがある。

- (60) そのことが原因で太郎は東京に行った{ハズナンダ/ノッダナー}

4. まとめ

以上本稿では、山形市方言のッダを取り上げて、その形式・意味・機能的な特徴を記述した。まとめれば次のようになる。

(a) 形式的特徴と分布

- (a-1) ャダは不変化詞であり、つねに促音を伴う(2.1)。
(a-2) ャダは平叙文にのみ後接し、平叙文であれば述語の種類(動詞述語・形容詞述語等)は問わない(2.2.1)。
(a-3) 前接形式には、蓋然性を表すモダリティ形式(ガモスンネ)や過去のケなどがある。後接形式としてはナとズがあり、主文末ではこの2形式のいずれかと必ず共起して用いられる。ッダが単独で用いられることはない(2.2.2)。
(a-4) ャダは、主文末のほか、従属節のうちス節のなかで用いられる(2.2.3)。

(b) 用法

(b-1) ッダは、「話し手は、ある根拠や確信・信念に基づいて、ある行動や状態が生起する／したのは自明のこと、当然のことであると考えている」といったことを表す (3.1)。

(b-2) 「自明性」といった意味と連動して、ッダは、当為表現や理由節を伴うことが多い (3.2)。

(b-3) またッダは、一定の条件のもとで、語用論的に、自身の行動の正当性の主張、聞き手にたいする非難や説得などを表すことがある (3.3)。

(b-4) ッダには聞き手目当て性がある (3.4)。

(b) の用法についてはまた、3.5 で、ハズダとの相違も確認し、ハズダでは論理的推論が行われるが、ッダでは行われないことを指摘した。

なお、ッダの語源については、形式面からは断定辞のダであろうと思われ、また、意味的には当該事態は自明のことであるといった話し手の主張を表すこと⁴⁾、名詞文や形容動詞文ではダが脱落してッダが付加されることがあること (2.2. (a)) などこの判断をサポートする。しかし、国立国語研究所 (1978) の河北町方言の例には、以下のように、ッダが、山形市方言にはないツダという形で用いられたと思われる例もある。

(61) シン ジューヅ コロマンテ° ナー マエバン サンナネケドレ。シナエゲバ ハルトモデサ デハルマンデ ワラスコ° ド デネケモ。タラダテ ナンジューダラド ホレ アンデ オガンナネツダッス ホレ。

(ん 十時 頃までは 毎晩 しなければならなかったものだよ。そうでないと 春 (に) 野良に 出るまで 藁仕事は 終わらなかったもの。俵だって 何十俵と ほれ 編んで おかねばならなかったし ほれ。26 ペ)

(62) シンダ ユンベナ ホンダケツダナ ホレ ジューゴニヅノ バンデ。

(そう 昨夜 (が) そうだったよな それ 十五日の 晩で。132 ペ)

ッダの語源については、現時点では確かなことはわからない。

【注】

- * 本研究は、平成 16 年度文部科学省科学研究費基盤研究 (B) (1) 「方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究」(代表者：大西拓一郎、課題番号 14310196) および平成 16 年度文部科学省科学研究費基盤研究 (B) (1) 「日本語史の理論的・実証的基盤の再構築」(代表者：金水敏、課題番号 16320059) によるものである。

1) ちなみにこの伝聞形式は、疑問化もできる。

(i) あそこの息子、大阪に行ったツタガー？ (大阪に行ったということか)

当該方言にはそのほかにドという伝聞形式もあるが、この形式は疑問化できない。ツタでは許された同意要求のネを後接した文も、ドでは不適切である。

(ii) あそこの息子、大阪に行ったド (行ったそうだ)

(iii) *あそこの息子、大阪に行ったドガ？

(iv) *あそこの息子、大阪に行ったドネ

ッタのほうが、メタ的に他者（特定できなくともよい）の発話（内容）を引用する形式である。

- 2) 当該方言では、「ようだ」「らしい」は用いられない。
- 3) ただし、カラ節や連体節に入らない (2.2.3)、聞き手目当てでないと用いられない (3.3 参照) といった特徴があり、他の命題目当てのモダリティ形式と性格を異にする。
- 4) 日本語を学ぶ学習者の作文などにも、話し手の（強い）主張を明示するために、
 - (i) グループ旅行と言えば名所を次から次訪れて、自由時間が少ないだ（オーストラリア、中級）といったかたちで「だ」がアイコンニックに用いられることがあるが、これと類似する事象と考えられる。

【参考文献】

- 国立国語研究所 (1978) 『方言談話資料 (1) -山形・群馬・長野-』秀英出版
- 渋谷勝己 (1999a) 「文末詞『ケ』-三つの体系における対照研究-」『近代語研究』第十集 武蔵野書院
- (1999b) 「山形市方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』1 大阪大学文学部社会言語学研究室
- (2000) 「山形市方言の文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』2 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- (2003) 「山形市方言における命令形後接の文末詞ナ・ネ・ヨ」『阪大社会言語学研究ノート』5 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- 日本語記述文法研究会編 (2004) 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』くろしお出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 森山卓郎 (1995) 「ト思ウ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞～φ～不確実だが高い確信があることの表現」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』くろしお出版

しぶや かつみ (大阪大学大学院)

sbj@let.osaka-u.ac.jp